

# ブラフマースートラのプラーナ説 — プラッシュスタパーダバーシュヤの風説との比較考察 —

長友泰潤

南九州大学 教養・教職センター 哲学研究室

2017年10月1日受付; 2018年2月1日受理

## On the theory of prāṇa in Praśastapādabhāṣya

Taijun Nagatomo

Laboratory of philosophy, Minamikyusyu University,  
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japann

Received October 1, 2017; Accepted February 1, 2018

In the theory of the Brahmasūtrabhāṣya (Bbh), Śāṅkara's commentary on Brahmasūtra, vāyu (or prāṇa) has two meanings, namely, the internal five winds and the god of wind. Vāyu the internal five winds come into the Self and divide into five parts. Each of which has a special quality. These parts are sometimes individually called prāṇa, udāna, samāna, apāṇa and vyāna depending on their organic function but sometimes 'prāṇa' is used as a general term for all five parts. And these five prāṇa aren't the function of the internal organs like manas and buddhi. When Prāṇa goes out of the Self, the body and all the sense organs become weak. Prāṇa plays an important role in the maintenance of the Self. In the view of Praśastapādabhāṣya (PB), vāyu (or prāṇa) has two meanings, namely, the internal five winds and the external natural wind.

And the atoms of Vāyu (winds) are combined and moved by the god (maheśvara). Vāyu the internal winds come into the Self and divide into some parts. These parts are sometimes individually call prāṇa and apāṇa and so on depending on their organic function but sometimes 'prāṇa' is used as a general term for all other parts. Prāṇa plays an important role in the maintenance of the Self.

In the view of Abhidharmakośabhāṣya (AK), vāyu is a primary element like pṛthivī, ap, and tejas, and its natural constitution is driving or moving. Vāyu doesn't mean the Brahman itself, and it doesn't consist of prāṇa, udāna, samāna, apāṇa and vyāna.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference between the view of vāyu (or prāṇa) in the Bbh and the view presented in the PB and AK. In the AK, vāyu doesn't mean the Brahman itself, and it doesn't consist of the some winds like prāṇa. In the Bbh, vāyu means the Brahman itself, and it consists of the some winds. In the PB, the atoms of Vāyu (winds) are combined and moved by maheśvara.

In these three schools, there is one similarity which the natural constitution of vāyu (or prāṇa) is driving or moving.

**Key words:** prāṇa, vāyu, five winds.

### 序 論

ここでは、ヴァイシェーシカ思想に見られる九実体の一つである風とヴェーダーンタ学派のシャンカラの思想に見られる風或いは生氣とを比較検討する。ヴァ

イシェーシカ学派については、プラッシュスタパーダバーシュヤ (Praśastapādabhāṣya), 以下 PB<sup>1)</sup> を取り上げる。シャンカラについては、既に、仏教思想の俱舍論 (AK)<sup>2)</sup> との比較検討をおこなったブラフマースートラ (以下 BS) に対する注釈書ブラフマースートラバーシュヤ (以下 Bbh)<sup>3)</sup> の見解を見ていくこととする。

BbhとAKとの比較考察においては、次のようなことがわかっている<sup>4)</sup>。Bbhの見解では、風(vāyu)或いは生氣(prāṇa)は宇宙的風、そして個人の氣息として説明されている。風・生氣はブラフマンの変異であるとされ、ブラフマンを認めないAKでは、当然、風はその変異ではない。Bbhでは、生氣は意とは別の概念を持つ存在であり、別個に教示される。AKでも、意は六識とともに七界の一つであり、風とは別に説かれている。さらに、Bbhでは、風が身体に入って、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住している時に、生氣と呼ばれる。これが、個人の生氣である。この生氣が身体から出ていこうとする時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体にとって、生氣は欠かせない存在であるとする。一方、AKには生氣について、それが五風となることや身体の維持と滅亡に関わるものであるという言説はなく、生氣の元となる風が対象を認識するという言説もない。また、AKでは、風の勝れた作用である増長とは増大、流動の意味を持つとされ、地界等の四大種の自相の中で、特に、風は灯火の動くように、次々と生じる場所を変えて行くから、草は動くと言う。また、品類論と経の中では、風界は軽さと動きであると言う。このような風の流動性や軽さ、動きを特徴とすることは、Bbhの生氣の持つ五つの機能が示すような流動性と動きという特徴と類似している。

このような、BbhとAKの風についての比較考察から明らかになった共通点や相違点に留意しながら、ヴァイシェーシカ学派の風について考察にしていく。

## 1. PBの風説

PBの中では、風性と結びついた風(vāyu)は実体の一つであり、触等の性質があると説かれている。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「[風は] 風性[という下位の普遍]と結びついているから風である。[風は、] 触・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・潜在的印象を有する。」

vāyutvābhisambandhādāvāyuh/  
sparśasamkyāparimāṇa-  
pṛthaktvasamyogavibhāga-  
paratvāparatvasamskāravān/<sup>5)</sup>

また、PBでは、風は色がないため目に見えないものであり、熱くも冷たくもないので、燃焼によって生じるものではないとする。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「風の触は非熱非冷であるから、燃焼によって生ずるものではない。[これは、ヴァイシェーシカストラの] 性質の列挙によって確定されている。色を有しないものは目に見えないと説かれている(ヴァイシェーシカストラ4.1.13)から、[風には] 数を始めとする七つ[の性質]がある。」

sparśosyānuṣṅāsītate satyapākajah/  
gunaviniveśāt siddhah/  
arūpiṣvacākṣuṣavacanāt sapta samkhyādayah/<sup>6)</sup>

さらに、PBでは、草の動きから、風に潜在印象があることを説いている。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「草の運動が説かれている(ヴァイシェーシカストラ5.1.14)から、[風には] 潜在的印象がある。」

tṛṇakarmavacanāt samskārah/<sup>7)</sup>

そして、PBでは、風を原子と結果から二種類に分ける。結果を特質とするものが、身体、感官(器官)、対象、氣息の四つである。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「そして、この風は、原子と結果と[の別]があるから二種類である。そのうち、結果を特質とする風には、身体・感官(器官)・対象・氣息の四種類がある。」

sa cāyaṃ dvividho anukāryabhāvāt

tatra kāryalakṣaṇāścaturvidhaḥ

śārīramindriyaṃ viśayaḥ prāṇa iti/<sup>8)</sup>

また、PBでは、四種類の特質のうち身体は、風神の世界に属し、苦楽の享受が可能であると説いている。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「そのうち、身体は、陰門より生じるものではないもののみであり、マルツ神(風神)の世界に属し、他の部分に支えられることによって、[苦楽の] 享受が可能である。」

tatrāyonijameva śārīraṃ marutām loke

pārthivāvayavopaṣṭam bhāccopabhogasamartham/<sup>9)</sup>

また、PBでは、四種類のうちの感官は、触を顕わにし、全身にくまなく存在する皮膚であると説かれている。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「感官(器官)は、すべての生き物に触を顕わにし、地などによって圧倒されていない風の部分によって新造され、全身に遍満する皮膚なる感官である。」

indriyaṃ sarvapṛāṇinām sparśopalambhakaṃ  
pṛthivyādy anabhibhūtair vāyavayavairārabdham  
sarvaśārīravāpi tvāgindriyam/<sup>10)</sup>

また、PBでは、四種類のうちの対象は、知覚されつつある触の基体であり、雲などを推したり保持したりすると説かれている。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「他方、対象は、現に知覚されつつある触の基体であり、触・音声・保持・振動を証相としており、ジグザグに進むことを本性としており、雲などを推したり保持したりする力がある。」

viśayastūpahabhyamānasparśasādhiṣṭhānabhūtaḥ  
sparśasābdadhṛtikampaliṅgastiryaggamanasvabhāvo  
meghādiṣṭhānadhāraṇādisamarthah/<sup>11)</sup>

また、PBでは、風は知覚されないが、速力の等しい風が出会うことで、凝集作用が起こり、それにより、多数であることがわかると説かれている。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「風は知覚されないけれども、凝集作用によって多数であることが推論される。また凝集作用とは、正反対の方向に働く速力の等しい風どうしが出会うことである。それもまた、部分を有するもの(全体)である二つの風が上方に進むことによ

て推論される。草などの動きによってそのことはまた推論される。

氣息は、身体の内であって精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であり、単一であるが、動きの違いによって呼気などと命名される。」

tasyāpratyakṣasyāpi nānātvaṃ  
sammūrechanenānumīyate/  
sammūrechanam punaḥ samāna-  
javayorvātvorviruddhadikkriyayoḥ  
sannipātaḥ sopi sāvayavinor  
vātvorurdhvagamanenānumīyate  
tadapi tṛṇādīgamaneti/  
prāṇontaḥśarīre rasamaladhātūnām  
preraṇādiheturekaḥ sankriyābhedād  
apānādisaṅjñām labhate//<sup>12)</sup>

また、風等の原子は、最高神の創造により、結合し運動が生じることが説かれている。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「その後また、生き物たちの享受を成り立たせようとして、最高神に創造しようとの願望が生ずる。その直後に、すべての自己に存し活動を始めた不可見力を待ってその結合が生じ、風の原子に運動が生じる。」

tataḥ punaḥ prāṇinām bhogabhūṭaye  
maheśvarasiṅkṣānantaram sarvātma-  
gatavṛttilabdhādūṣṭāpekṣebhyastatsamyogebhyaḥ  
pavanaparamāṇusu karmotpattau<sup>13)</sup>

さらに、まず、風の原子が生じると説かれている。

すなわち、PBの言及は以下のごとくである。

「それによって、風の原子に運動が生ずる。その時、風の原子は互いに結合することによって、二原子体などの順序で大きな風が生じ、それが揺れ動きながら虚空の中に立脚する。」

teṣām sparaśparasamyogebhyo  
dvyāṇukādiprakrameṇa mahān vāyuh  
samutpanno nabhasi dodhūyamānastiṣṭhatti//<sup>14)</sup>

## 小 結

以上の検討から、PBでは、風(vāyu)は実体の一つであり、触等の性質がある。また、風は色がないため目に見えないものであり、熱くも冷たくもないので、燃焼によって生じるものではないとする。さらに、草の動きから、風に潜在印象があるとされる。

また、風を原子と結果から二種類に分け、結果を特質とするものが、身体、感官(器官)、対象、氣息の四つであるとする。この四種類のうち身体は、風神の世界に属し、苦楽の享受が可能であり、感官(器官)は、触を顕わにし、全身にくまなく存在する皮膚である。さらに、対象は、知覚されつつある触の基体であり、雲などを推したり保持したりする。氣息は、体内にあり、精髓と汚れと要素とを動かす原因であり、単一だが、動きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いている。

また、風は知覚されないが、速力の等しい風が出会

うことで、凝集作用が起こり、それにより、多数であることがわかる。

そして、この風の原子は、最高神の創造により、結合し運動が生じる。

## 2. Bbhの見解とPB, AKの見解との比較

### 1) 個人の生氣

Bbhではムンダカ・ウパニシャッドを引用し、一切の生氣はブラフマンから生じ、空、風、火、水、地がブラフマンから生じるように、生氣、意、及び一切の器官がブラフマンから生じるとする。BPでも、風の原子は、最高神の創造しようという願望により、結合し運動が生じるとされる。しかし、仏教思想であるAKでは、当然ブラフマンを認めないので、最高神の願望もなく、風はその変異ではない。

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「〔同様に一切の生氣(prāṇa)も〔最高我より生ず、〕一切の世界、一切の神々、一切の存在(bhūta)飛散す。〕(プリハド2.1.20)というこのような類の生氣の発生を説く。ここでは、〔即ちこの引用文では〕世界等が最高のブラフマン(brahmaṇa)から発生するように、それと同様に生氣もまたその通りであるとの意味が述べられている。

同様に、《これより、生氣(prāṇa)、意(manasa)、及び一切の器官(indriya)生ず。空、風、火、水、すべての支持者である地が〔生ず〕》(ムンダカ2.1.3)と、かような箇所などによっても、空等のように、生氣にも発生があると認めねばならない。〕<sup>15)</sup>

また、Bbhでは、生氣に差別はなく、ブラフマンの変異であり、意及び一切の感官の生起は、生氣の生起とは別に説かれていることから、生氣が意と感官とは別の存在であるとされる。しかし、PBでは、Bbhと少し違い、風自体を原子と結果から二種類に分け、結果を特質とするものという前提ではあるが、身体、器官(感官)、対象、氣息の四つであるとする。AKでは、意は六識とともに七界の一つとされ、PBと同じく、生氣と別に説かれている。<sup>16)</sup>

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「また、主要の生氣も別の生氣と同様にブラフマンの変異(vikāra)であると〔前経の説明を〕拡大して示す。またそれについて〔次のように〕一切の生氣は全く差別なく、ブラフマンの変異であると既に説明された。すなわち、《この〔ブラフマン〕より、生氣、意、及び一切の器官(indriya)は生ず》(ムンダカ2.1.3)と器官を伴う意とは別に、生氣の発生が聖典に〔説かれているか〕らである。〕<sup>17)</sup>

Bbhでは個人の生氣についても言及しており、風が身体に入って、五つの局面に別れ、生氣(プラーナ)と呼ばれるとする。PBでは、氣息は体内にあり、単一だが、動きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いている。この見解はBbhと類似している。AKには風(vāyu)が五つの生氣に別れるという言説はない。<sup>18)</sup>

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「まさしく、風がこの自己の中に入って五つの

局面 (pañca-vyūha) に別れ、特殊の性質で安住しているときに、生氣 (prāṇa) という名で呼ばれる。〔風とは〕別の実在でもなく、ただ風だけ (vāyumātra) でもない。〕<sup>19)</sup>

さらに、Bbh では、個人の生氣について、それが出ていこうとした時には、器官は衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立には欠かせない存在とする。PB では、氣息は身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因となるとされており、その存在が身体と器官の存立には欠かせないとする Bbh の見解と矛盾しない。

すなわち、Bbh の言及は以下のごとくである。

「また、《汝らのうち、或ものが出て行く時、身体 (śarīra) が最も悪しき状態にあるが如く見えるもの、其のものが汝らのうち最勝なり》(チャンドグヤ 5.1.7) と論じて、一つ一つ言語器官等が出て行っても、ただその機能が欠けるだけで、前と同じように生命が持続されることを明示したあと、生氣が出ていこうとした時に、言語器官等が衰弱に陥り、且つ身体崩壊 (śarīra-pāta) が付随することを聖典は明示して、身体と器官の存立が生氣に基づくことを明示している。〕<sup>20)</sup>

また、Bbh では、個人の生氣の五つの機能について説明があり、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気 (プラナーナ) と後方への機能で、入る息等の作業をする吸気 (アパーナ)、両者の接合において、力を要する作業の原因となる媒気 (ヴァヤーナ)、上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気 (ウダーナ)、身体は一切の支分に等しく食の精髓を運ぶ等気 (サマーナ) の五つの機能があるとする。既に述べたように、PB でも、氣息は体内にあり、単一だが、働きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いており、五風に通ずる考えからが見られる。

すなわち、Bbh の言及は以下のごとくである。

「聖典に《呼気・吸気・媒気・上気・等気》(ブリハド 1.5.3) とこのように指名されているから、また主要の生氣に、独特の所作がある。そして、この機能の区別は所作の区別に依存している。呼気 (prāṇa) は前方への機能で、出る息等の作業をする。呼気 (apāna) は後方への機能で、入る息等の作業をする。媒気 (vyāna) はこの両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる。上気 (udāna) は上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である。等気 (samāna) は身体は一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ。〕<sup>21)</sup>

さらに、Bbh では、生氣が呼気等の五つの機能によって、全身に遍満しているので、微塵であるとされる。PB でも、風の原子に運動が生ずるとあり、表現は異なるが、微塵であることは同じである。

すなわち、Bbh の言及は以下のごとくである。

「また、この主要な生氣は、残りの生氣と同様に、微塵と理解されるべきである。そしてこの場合にもまた、微塵とは、微細と限定とである。それは極微 (paramāṇu) とは等しくない。〔呼気吸気等の〕五つの機能によって、全身に遍満しているからである。〔主要の〕生氣は微細である。〔死に際して

身体から〕出発する時に、傍らにいる人に認識されないからである。また、〔生氣は〕限定されている。出発、進行、帰来が聖典に説かれているからである。〕<sup>22)</sup>

また、Bbh では、聖典において、生氣と器官が別々に表示されているから、器官と主要の生氣が別ものであるとされている。

すなわち、Bbh の言及は以下のごとくである。

「発声器官等は〔主要の〕生氣とは全く別ものである。何故か。表示に区別があるからである。表示に区別があるとは何か。話題になっている諸生氣は、最勝〔の生氣〕を除外して残った十一の器官であると言われる。聖典において、次のように表示が認められるからである。すなわち、《これより、生氣、意、並びに一切の器官生ず》(ムンダカ 2.1.3) というこのような類の場所において、生氣と器官とが別々に表示されているからである。〕<sup>23)</sup>

さらに、Bbh では、主要の生氣と残りの器官との違いについても言及している。器官が熟睡している時、主要な生氣は一人目覚めている。また、主要な生氣は死に襲われない。そして、主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生氣はそうではないとする。PB では、風を原子と結果から二種類に分け、風の結果を特質とするものが、身体、感官 (器官)、対象、氣息の四つであるとする。このうち、感官 (器官) は、触を顕わにし、全身にくまなく存在する皮膚であるとされる。これは、発声器官等の感官が生氣とは別であるとする Bbh の見解と少し異なる。PB では感官は風の結果である。また、AK では、生氣についての記述もなく、その元となる風 (vāyu) が対象を認識することもない。<sup>24)</sup>

すなわち、Bbh の言及は以下のごとくである。

「また、主要〔の生氣〕と残りには、特徴の違いがある。発声器官等が熟睡している時、ただ主要〔の生氣〕独りが目覚めている。また、そのみが死に襲われない。しかし、残りは襲われる。またそれ (主要の生氣) だけが、そこ (身体) に安住することと、そこから出発することによって、身体の維持と滅亡の理由となる。また、器官は対象を知覚することの原因であるが、〔主要の〕生氣はそうではない。このような類の多くの特徴の区別が、生氣と器官の間にある。このような理由からしても、これらに別の実在たる関係が成立する。〕<sup>25)</sup>

## 2) 宇宙的風

Bbh ではムンダカ・ウパニシャッドを引用し、風がプルシャのために、車輪の穴の如き穴をあけ、プルシャはそこを通り、太陽に到達する。PB でも、風等の原子は最高神の創造により生じることが説かれているが、このような壮大な、神話的な風は AK の言説にも見られない。<sup>26)</sup>

すなわち、Bbh の言及は以下のごとくである。

「〔プルシャ (puruṣa) がこの世界を出ていくとき、彼はヴァーユ (vāyu) に到着する。その〔ヴァーユ〕は、彼のために、あたかも車輪の穴 (rathacakra)

の如き〔穴〕をそこにあける。それによって彼は上昇す。彼は太陽に到着す》(ブリハト5.10.1) というのがそれである。』<sup>27)</sup>

また、Bbhではプルシャは神の世界からヴァーユに入り、さらに太陽に達するとされる。

「〔月(六か月・半年)より〔プルシャは〕神の世界(devaloka)に〔達す〕、神の世界より太陽〔の世界〕に〕(ブリハド6.2.15)と朗誦する。この場合に、太陽が〔ヴァーユに〕続いて到達される〔ことを確実にする〕ために神の世界から〔プルシャが〕ヴァーユに入ると〔理解〕すべきであろう」<sup>28)</sup>

また、Bbhでは、対論者の説として、生気が五種にはたらく風であるとしている。さらに、この一切の世界は生氣と名付けられ、金剛杵が振りかざされるように、風が雨雲の状態で回転するとき、電光、雷鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るとする。また、聖典が引用され、「ヴァーユにはまさに個物なり、ヴァーユは全体なり、かく知る者は再死に打ち勝つ」という言及が示されている。これに対するヴェーダーンタ派の答えとして、敵論者の説を否定するのではなく、これはまさにブラフマンであると承認されねばならないとする。PBでは、対象としての風が、知覚されつつある触の基体であり、触・音声・保持・振動を証相としており、雲などを推したり保持したりするとする。また、AKでも風の勝れた作用は増大と流動であり、その自相は動きとされているので、PBもAKも全体の印象はBbhと一致している。

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「〔対論者の主張〕広く知られているように、生氣(prāna)とは五種にはたらく風(pañcavṛttivāyu)である。また、まさに広く知られていることから、金剛杵(vajra)は稲妻であろう。そしてこれは風の偉大がのべられているのである。どうしてか。この一切の世界は、生氣と名付けられ、五種にはたらく風に安住して、動揺する。またまさに風にもとづいて、大いに恐るべき金剛杵が、振りかざされる。何となれば、風が雨雲の状態で回転する時、電光、雷鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るからである。また、風の認識から、まさしくここに不死たること(amṛtatva)がある。即ち、《ヴァーユ(風神)はまさに個物なり。ヴァーユは全体なり。かく知る者は再死に打ち勝つ》(ブリハド3.3.2)と他の聖典に説かれているからである。このようなわけで、ここで、〔すなわち、生氣〕は風であると承認されねばならない。

〔ヴェーダーンタ学派の答破〕以上のように提言されたので、我々は〔次のように〕答える。— ここでは、これはまさにブラフマンと承認されねばならない。』<sup>29)</sup>

## 結 論

Bbhでは、一切の生氣はブラフマンから生じ、空、風、火、水、地がブラフマンから生じるように、生氣、意、

及び一切の器官がブラフマンから生じるとする。BPでも、最高神の関与が説かれており、風の原子は、最高神の創造願望により結合し動きが生じるとされる。しかし、仏教論書であるAKでは、仏教思想においてブラフマンを認めないので、最高神の関与はなく、風はその変異でもない。

また、Bbhでは、生氣に差別はなく、意及び一切の感官の生起は、生氣の生起とは別に説かれていることから、生氣が意と感官とは別の存在であるとされる。しかし、PBでは、風自体を原子と結果から二種類に分け、結果を特質とするものが、身体、器官(感官)、対象、氣息の四つであるとする。ここには、見解の相違が見られる。AKでは、意は、Bbhと同じく、生氣と別に説かれている。さらに、Bbhでは個人の生氣についても言及しており、風が身体に入って、五つの局面に別れ、生氣(プラーナ)と呼ばれるとする。PBでは、氣息は体内にあり、単一だが、働きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いている。この見解はBbhと類似している。AKには風(vāyu)が五つ生氣に別れるという言説はない。

また、Bbhでは、個人の生氣について、それが出ていこうとした時には、器官は衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立には欠かせない存在とする。PBでは、氣息は身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因となるとされており、その存在が身体と器官の存立には欠かせないとするBbhの見解と矛盾しない。

さらに、Bbhでは、個人の生氣の五つの機能について説明があり、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気(プラーナ)と後方への機能で、入る息等の作業をする吸気(アパーナ)、両者の接合において、力を要する作業の原因となる媒気(ヴァーヤナ)、上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気(ウダーナ)、身体は一切の支分に等しく食の精髓を運ぶ等気(サマーナ)の五つの機能があるとする。既に述べたように、PBでも、氣息は体内にあり、単一だが、働きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いており、Bbhの五風に通ずる見解が見られる。Bbhでは、生氣が呼気等の五つの機能によって、全身に遍満しているもので、微塵であるとされる。PBでも、風の原子に運動が生ずるとあり、表現は異なるが、微塵であることは同じである。

また、Bbhでは、聖典において、生氣と器官が別々に表示されているから、器官と主要の生氣が別ものであるとされている。さらに、Bbhでは、主要の生氣と残りの器官との違いについても言及している。器官が熟睡している時、主要な生氣は一人目覚めている。また、主要な生氣は死に襲われぬ。そして、主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生氣はそうではないとする。PBでは、風を原子と結果から二種類に分け、風の結果を特質とするものが、身体、感官(器官)、対象、氣息の四つであるとする。このうち、官(器官)は、触を顕わにし、全身にくまなく存在する皮膚であるとされる。これは、発声器官等の感官が生氣とは別であるとするBbhの見解と少し異なる。PBでは感官

は風の結果である。また、AK では、生气についての記述もなく、その元となる風 (vāyu) が対象を認識することもない。

Bbh ではムンダカ・ウパニシャッドを引用し、風がプルシャのために、車輪の穴の如き穴をあけ、プルシャはそこを通り、太陽に到達する。PB では、風等の原子は最高神の創造により生じることが説かれているが、このような壮大な、神話的な風は AK と同様に見られない。

また、Bbh では、対論者の説として、生气が五種にはたらく風であるとしている。さらに、この一切の世界は生气と名付けられ、金剛杵が振りかざされるように、風が雨雲の状態で回転するとき、電光、雷鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るとする。また、聖典が引用され、「ヴァーユにはまさに個物なり、ヴァーユは全体なり、かく知る者は再死に打ち勝つ」という言及が示されている。これに対するヴェーダーンタ派の答えとして、敵論者の説を否定するのではなく、これはまさにブラフマンであると承認されねばならないとする。PB では、対象としての風が、知覚されつつある触の基体であり、触・音声・保持・振動を証相としており、雲などを推したり保持したりするとする。また、AK でも風の勝れた作用は増大と流動であり、その自相は動きとされているので、PB も AK も風を動きや流れと捉えており、これは Bbh と一致している。

このように、AK が Bbh と PB と大きく異なるのは、Bbh や PB が風をブラフマン或いは最高神によって生じるとするのに対して、AK はブラフマンを認めないことである。しかし、AK も風は動きを自相とするものと捉えており、ここは共通している。PB は風を原子と結果から二種類に分け、風の結果を特質とするものが、身体、感官 (器官)、対象、氣息の四つとし、このうち、感官 (器官) は、触を顕わにし、全身にくまなく存在する皮膚としているので、ここは発声器官等の感官が生气とは別であるとする Bbh の見解と相違する。しかし、全体として、Bbh と PB の風についての言説は矛盾点が少ないと言える。

## 摘 要

風についての見解を比較してみると、Bbh と PB との風説は基本的に矛盾しない。一方、AK が Bbh と PB と大きく異なるのは、Bbh や PB が風をブラフマン或いは最高神によって生じるとするのに対して、AK はブラフマンを認めないことである。しかし、AK も風を動きを自相とするものと捉えており、風の本性に関しては共通している。また、PB には Bbh と矛盾しない見解が多く見られるが、風を原子と結果から二種類に分け、風の結果を特質とするものが、身体、感官 (器官)、対象、氣息の四つとし、このうち、感官 (器官) は、触を顕わにし、全身にくまなく存在する皮膚とする見解は、発声器官等の感官が生气とは別であるとする Bbh の見解と少し異なっている。

## 注 記

- 1) PB Praśastapādabhāṣya Sri Garib Dass Oriental Series 13 edited by Vindhyesvari Prasad Dvivedin Sri Satguru Publications 1984
- 2) AK Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu edited by Prof.P.PRADHAN K.P.Jayaswell Research Institute Patna 1975
- 3) Bbh Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya edited with special references from Ratnaprabhā Nyāyanirṇya etc. by K.L.Joshi Parimal Publications Vol.1.2. Parimal Sanskrit Series No.1. 1996
- 4) 長友泰潤 「ブラフマーストラのプラーナ説」南九州大学研究年報第47B号 pp.23-27
- 5) PB p.44 II. 1-2. 宮元啓一『インドの「多元論哲学」を読む』春秋社 2008 p.32参照
- 6) PB p.44 II. 2-4. 宮元上掲書 pp.32-33参照
- 7) PB p.44 I. 5. 宮元上掲書 p.33参照
- 8) PB p.44 II. 5-7. 宮元上掲書 p.33参照
- 9) PB p.44 II. 7-8. 宮元上掲書 p.33参照
- 10) PB p.44 II. 8-10. 宮元上掲書 p.33参照
- 11) PB p.44 II. 10-12. 宮元上掲書 p.33参照
- 12) PB p.44 II. 13-18. 宮元上掲書 p.33参照
- 13) PB p.45 II. 19-21. 宮元上掲書 p.35参照
- 14) PB p.45 I. 21~p.46 I. 1. 宮元上掲書 p.35参照
- 15) Bbh ad BS 2.4.1 Bbh Vol.2. p.630, II. 12-16. 金倉円照『シャンカラの哲学』下 p.102 II. 4-7参照
- 16) AK 1. 12 AK p.11 II. 11-14. 七界は意と六識とされている。
- 17) Bbh ad BS 2.4.8 Bbh Vol.2. p.638, II. 1-3. 金倉上掲書下 p.118 II. 5-8参照
- 18) AK 1.12 AK p.8 II.11-13. 風は地、水、火とともに四大種の一つである。
- 19) Bbh ad BS 2.4.9 Bbh Vol.2. p.640, II. 12-13. 金倉上掲書下 p.122 II. 5-8参照
- 20) Bbh ad BS 2.4.11 Bbh Vol.2. p.641, II.15-18. 金倉上掲書下 p.125 II. 1-5参照
- 21) Bbh ad BS 2.4.12 Bbh Vol.2. p.641, I.26~p.642, I.4 金倉上掲書下 p.126 II. 3-9参照
- 22) Bbh ad BS 2.4.13 Bbh Vol.2. p.642, II.12-14. 金倉上掲書下 p.127 II. 10-14参照
- 23) Bbh ad BS 2.4.17 Bbh Vol.2. p.647, II. 4-7. 金倉上掲書下 p.133 II. 13-17参照
- 24) AK 1. 12 AK p.8 II. 19-22. 風界は動きとされ

ている。

- 25) Bbh ad BS 2.4.19 Bbh Vol.2. p.648, II.8-11.  
金倉上掲書下 p.135 II. 3-8 参照
- 26) AK 1. 12 AK p.8 II. 18-19. 風界の優れた作用  
である増長とは増大と流動を意味するが、神話  
的な風についての言及はない。
- 27) Bbh ad BS 4.3.2 Bbh Vol.2. p.988, II.10-11.  
金倉上掲書下 p.553 II. 14-16 参照
- 28) Bbh ad BS 4.3.2 Bbh Vol.2. p.989, II.4-5.  
金倉上掲書下 p.554 II. 12-15 参照
- 29) Bbh ad BS 1.3.39 Bbh Vol.1. p.359, 1.7～p.360  
1. 3. 金倉上掲書上 p.281 II. 5-14 参照

